2023年10月15日佐土原キリスト教会礼拝説教
聖書箇所：マタイ福音書5章38～48節
説教題：あなたの敵を愛しなさい

16世紀、オランダでメノナイトの信者として生きたディレク・ヴィレムスという人は、「アナバプテストである―(幼児洗礼を受けていたのに、成人になってから再び洗礼を受けた)」という罪で捕らえられ、牢獄に閉じ込められていました。しかし運良く牢獄から脱出することが出来たのです。彼は、氷の張っている池を走って逃げました。ところが、彼の脱獄に気付いた官憲が追いかけて来ました。彼は牢につながれて痩せていましたから、池の氷は割れませんでした。官憲は良く食べ、良く飲んで、太っていましたから、官憲が氷を走ったら氷が割れて池には落ちてしまいました。ディレク・ヴィレムスは、官憲が池に落ちたのを見て、喜んだのではなく、そこで「あなたの敵を愛しなさい」(ルカ6:27)というイエス様の言葉を思い出すのです。そして自分を追いかけて来た官憲を助けに行ったのです。「敵を愛すること」は、不可能な空文ではない。私達はこんな先達を持っているのです。この聖書個所でこの話は省けないと思って初めにご紹介しました。

今朝の聖書箇所は、「この教えこそがキリスト教を他のものから区別する」と言われる箇所です。しかし恐ろしく難しい箇所です。聖書で使徒パウロは祈っています。「あらゆる良いわざとことばとに進むよう、あなたがたの心を…強めてくださいますように」(2テサロニケ2:17)。信仰生活の目標は、私達が沢山の恵みを経験することだけではない。実際、豊かな恵みを経験します。日々を支えられ、希望を与えられ…本当に大きな恵みです。しかし恵みが与えられるのは、それによって神への信頼を増し加えられ、神に従うことを覚え、少しでもイエス様に似た者に変えられ、天国に備えるためです。C.S.ルイスは言いました。「来世でも、現世における行いの結果としてのみ生まれるような、そんな人間であることが必要とされる機会は常に存在するに違いない…重要なのは、人々が自己の内部に、そのような品性の少なくとも萌芽をもっていなければ、天国が環境的にどんなにすばらしいところであったにしても、それは彼らにとっては『天国』になりえない…つまり、神が我々のために備えたもう深い、強烈な幸福を、幸福として味わうことができない、ということなのである」(C.S.ルイス)。その意味で、私達は御言葉によって天国向きに変えられて行かなければならないのだと思います。それが信仰生活の目標だと思います。そのような意識で今朝の御言葉にも向かいたいのです。

ここには2つのテーマがあります。38～42節「復讐をしてはならない」ということ、43～48節「敵を愛しなさい」ということです。2つの内容からイエス様のメッセージの内容(ポイント)を考えたいと思います。

38節でイエスは「『目には目で、歯には歯で。』と言われたのを、あなたがたは聞いています」(38)と言われました。「レビ記24章」に「もし人がその隣人に傷を負わせるなら、その人は自分がしたと同じようにされなければならない。骨折には骨折。目には目。歯には歯。人に傷を負わせたように人は自分もそうされなければならない」(レビ 24:19～20)とあります。これは一般には「覚えていろ、今に仕返ししてやる」という意味合いで受け取られますが、本来の意味はそうではありません。古代中東世界では「やられたら何倍もの仕返しをする」ことが称賛されました。その中でこの戒めは「傷を与えた人が罰せられるその罰は、自分が与えた傷と同じものでなければならない、それ以上の傷―(何倍もの仕返し)―を負わされることがあってはならない」という、むしろ「憐れみの決まり」だったのです。しかも「あなたは彼に片目を潰されたのだから、彼の片目だったら潰しても良い―(やれ！)」という「被害者が加害者に仕返しする基準」を言っているのではなくて―(当時は既に裁判の制度が整っていて)―「裁判人が裁判において加害者に下す罰の基準」を言っているようです。つまり罰が裁判で決められることによって「被害者による加害者への個人的な復讐を防ぐ」という意味があったのです。いずれにしても「旧約律法」の趣旨は、個人的な復讐を戒めることでした。しかしパリサイ人や律法学者は、その意味を捻じ曲げて、この決まりを、個人の復讐を正当化するために用いました。そこでイエスは、まずこの律法の本来の意味を確認されたのです。それが「悪い者に手向かってはいけません」(39)、「あなたに悪いことをした者に復讐をしてはいけない」という言葉なのです。

なぜ「復讐してはいけない―(仕返しをしてはいけない)」と言われるのでしょうか。先日まで放送されていた「ヴィヴァン」というドラマをご覧になった方、いらっしゃるでしょうか。主人公の父親は、ある国の

内戦で溢れかえった孤児達を養うことに尽力していたのですが、内戦に責任のある権力者に向かって言うのです。「憎しみと復讐からは何も生まれない」。心に残る場面でした。世界各地の紛争地域の現実は、報復に対する報復、いつまでも問題は収まらない、そうしている間に人が死んで行くのです。仕返しが結局は解決をもたらさない、だから復讐が禁じられているのか。それは現実的な意味で重要なことだと思います。しかしそれだけではないのです。もっと根本的なことがあるのです。聖書は言います。「自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる』」(ローマ 12:19)。つまり、復讐(仕返し)は、神様に属することであり、復讐(仕返し)は、神様に任せるべき事柄だからなのです。

しかしイエスは「復讐をするな、仕返しをするな、神に任せなさい」と言われただけではない。「では具体的にどう生きるのか」。39～42 節「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも取らせなさい。だれかが、一ミリオン行くように強いるなら、一緒に二ミリオン行きなさい。求める者には与えなさい。あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない」(39～42)。「打たれたら打ち返すのが当然だが、あなたは侮辱に当然でない方法で応えなさい」、「下着を取られたら『返してくれ』と言うのが当然だが、当然でない方法で応えなさい」と言われる。「言われたことを嫌々するではなく、進んで 2 倍の仕事をしなさい、当然でない方法で応えなさい」と言われる。聖書は「自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい」(ローマ 12:19)と言った後、こう続けます。「もしあなたの敵がうえたなら、彼に食べさせなさい。渇いたら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい」(ローマ 12:20～21)。イエスはそのように「キリスト者は、復讐(仕返し)は神に任せ、あなたは相手に復讐するのではなくて、むしろ相手に対して『当然でない方法』、『悪に対して善で応対する』、『相手の頭に炭火を積む』、そのような生き方をしなさい」と言われたのです。

しかしそこにも留まらず、イエスはさらに一連の教えをまとめるようにこう言われます。43 節「『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め』と言われたのをあなた方は聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」(43)。「自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め」というのも、人々がパリサイ人や律法学者から聞かされていた教えです。「旧約聖書」には「隣人を愛しなさい」という教えはありますが、「自分の敵を憎め」という教えはありません。ユダヤ人は長い間、外国から苦しめられて来ました。だから人々には「外国の隣人を愛する」という感情より「(敵である)外国人を憎む」という感情の方がぴったり来るのです。それで宗教家は「隣人を愛しなさい」という戒めに「自分の敵を憎むのは当然だ」という教えを加えたのです。私達も、何かにつけて「敵をつくる―(人を嫌う、受け入れない、憎む)」ということがあるのではないでしょうか。(私もそうです)。心の中で誰かを敵(ライバル)にしてしまう思いがあるのです。敵にするから心を閉ざしてしまう、憎むのです。しかし、私達が「愛」と思っているものにも、1 つ間違えば、手のひらを返して憎むようなものが含まれているのではないでしょうか。ある牧師は「私達の愛は腐っている」と言っておられました。だからイエスが言われるのは、結局「誰かを敵にするような生き方を止めなさい」、「傷ついた(腐った)愛に生きることを止めなさい」ということではないでしょうか。そうではなく、「自分の回りの人に対して寛大に生きる」、「当然でない生き方をする」、「炭火を積むような生き方をする」、そう奨められるのです。そのことが、言い換えれば「敵をつくるのではなく、むしろ敵と思える人さえ愛する」ということになるのではないでしょうか。「それが真に愛に生きることだ」と主は言われるのではないでしょうか。

こう申し上げるは簡単ですが、もちろん難しいです。どうしてイエスは、このような厳しい戒めを、難しい生き方を勧められるのでしょうか。「当然」の論理で相手の悪に、悪で報いたら、その流れに何かの変化が起こるでしょうか。そうではない。頬を打たれて打ち返したら、怒りや憎しみを大きくするだけでしょう。この話は先日もしましたが…。ある牧師の家の隣にポチという犬がいて、明け方 4 時頃になると吠え始める。牧師は目を覚まされ、睡眠不足が続きます。「うるさい、黙れ!」と叫びます。家族からは「牧師でしょ。そんなことを言っても良いの」と言われますが、牧師はポチへの憎しみが湧き、ポチに腹を立てました。ポチ

の前を通る時には歯をむいて睨みつけました。ポチも吠え返します。礼拝説教の声がマイクを通して隣に洩れるだけで、ポチは吠えます。牧師は神の愛を語りながらイライラします。睡眠不足、苛立ち、怒り、憎しみ、いよいよ限界に達した時、彼は 1 つの話を思い出しました。「ある人が庭に芝生を植えました。ところが芝生と一緒にタンポポが生えて来ました。抜いても、抜いても生えて来ます。専門家に相談したら言われました。『どうしてもタンポポを退治できないのであれば、タンポポを愛することを学んだらよいでしょう』」。牧師は思いました。「ポチを退治できないのであれば、愛することを学ぼう」。ポチを見たらニコッと笑いかけることを始めました。最初は吠えていたポチが、徐々に様子が変わって来て、尻尾を振りながら近づいて来るようになり、遂に牧師の胸に飛び込んで来るようになった。それ以来、ポチが吠えても気にならなくなった、という話です。牧師は言っておられます。「愛するということは、意志の問題である。愛せないのではない。愛さないから愛せないのである。好悪の感情に支配されずに、愛する決意をして、実際に愛することから、愛が始まるのである」(横山幹雄)。

敵のような人でも、私達が違う反応を示したら、まして「愛」を示したら、何かを感じるのではないでしょうか。そこに違う何かが、違う人間関係が生まれる可能性があるのではないでしょうか。いやそれだけでなく、結局イエスが言われることは、「仕返しすることによって、人を憎むことによって、私達は生きて行けるのか。健全な人生を作って行けるのか、そうではない、私達は、愛によって生きて行くしか道はないのだ」ということではないでしょうか。「百万人の福音」に、ご主人を交通事故で亡くした姉妹の話がありました。難しい裁判でした。でも彼女は、最後に加害者にこう言いました。「事故は起こそうと思って起こすものではないので、これで終わりにしましょう。私はクリスチャンなので、あなたを赦したいと願っています」。加害者は一瞬にして表情を緩め「ありがたいおことばを頂いて感激ました」、そう言って深々と頭を下げたのです。そうやって、人は、１つ１つのことに区切りをつけることが出来て、前に向かって、あるべき道を歩いて行けるのではないでしょうか。

しかしイエス様は、それ以上の理由を語られます。「それでこそ、天におられるあなた方の父の子どもになれる(から)」(45)。これは「敵を愛せるようになったら神の子にして上げよう」ということではありません。「あなた方の父の…」と言われている。イエスを信じることによって私達は(誰でも)「神の子」にして頂けるのです。しかしここで言われていることは、名前だけの「神の子」ではなくて、名実ともに「神の子」になる、中身も「神の子」になる、ということです。ヘブル語で「…の子」というのは、「…に似る者、…のような者」という意味があります。「神の子になる」と言われているのは、「神に似る者になる」ということです。

では、神はどういうお方か。45 節「天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせて下さる」(45)、「神は悪い人にも良い人にも恵みを与える方である」というのです。「なぜ神は、悪い奴に恵みなんか与えるのか」、私達は抵抗を感じるかも知れません。しかしその時、私達は自分を「正しい人」に置いているのです。でも聖書は言います。「私達がまだ弱かったとき、キリストは定められた時に、不敬虔な者のために死んでくださいました。正しい人のためにでも死ぬ人はほとんどありません。情け深い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んで下さったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます」(ローマ 5:6～8)。私達は、初めから神の愛に相応しい者だったから神に繋がるようになったのか。そうではありません。森繁昇兄が信仰を持った切っ掛けは、彼が周りのクリスチャン達を見ていて、「バカじゃなかろか。空気に向かって祈って何になるのか」と思って、「聖書の中に必ずバカなことが書いてある、そういうところを見つけて彼らの前で笑ってやって目を覚まさせてやろう」と聖書を読み始めたことでした。ところが聖書に捕えられたのです。彼ほどはっきりした敵対心でなくても、私達も皆、神に背を向けて生きていたのです。私は大学の時、「もう教会には行かない」と決めていました。しかし神様は、そんな私を憐れんで、神を喜ぶようにして下さったのです。今でも私達は―(「私達」と言ってよろしいでしょうか)―神に喜ばれない生き方をしていることも多いと思うのです。しかし神の「にもかかわらず愛そうとされる愛」があるからこそ、私達は信仰生活を続けて行けるのです。ある幼稚園の先生が言われたそうです。

「愛されたことのない子は、愛することを知らない」。でもキリスト者は、敵に愛された経験を持っているのです。私達は、敵であったイエス様に十字架で死んでもらって、やっと自分の罪が分かり、やっと砕かれて神の味方へと変えられたのです。世の中には素晴らしい人達が沢山います。「キリスト者である」と言っている自分が恥ずかしくなることがあります。しかしどんなに素晴らしい人でも、その人達ではなく、キリスト者が知っていること、それが「敵に愛された経験」です。神様の「敵を愛する愛」以外に私が生かされる方法はなかったから、そしてその愛で愛された者だから、イエスは私達に「あなたも神を知る者としてそのように生きなさい、それが神に似ることだ」と言われるのです。

しかしもう１つ、大切なポイントがあります。イエス様の言葉は福音です、救いです。救いとは、自由を与えるものです。では、この教えにおける自由とは何でしょうか。日本人の生き方の最も基本にあるのは「損をしないように生きる」ということだそうです。私達はある意味で、損をしないように生きることに汲々としているのではないでしょうか。それは「あの人のお蔭でこんな目に遭わされた、こんな思いをした、いつか仕返しをしなければこっちの損だ」という思いに繋がるのではないでしょうか。しかし、そう思っている間は、相手にずっと縛られて過ごすことになるのです。あのキング牧師のお父さんは、「妻と息子を殺した人たちを憎んでいないか」と聞かれた時、こう答えました。「そんなことをする時間は私にはない。憎むことは過去に生きることであり、すでに行なわれてしまった行為を現在に引きずって生きることだ。憎しみと言うのは、満ち足りた思いから最も遠く離れた感情だ。それはひどいことをした相手に対して、二重の勝利を与えることになる。過去において一度、そしてまた現在にも勝利を与えてしまう。人を憎んでいる限り、あなたは過去に縛られ続ける」。その意味で、イエス様の言葉は、私達を解放する言葉だと思います。それは大きく解釈すれば、「敵のような『辛い運命』を愛する」ことによって私達の人生に対する考え方そのものを解放する言葉かも知れません。

具体的にどうすれば良いのか。それは「祈ることから始める」ことです。主は「迫害する者のために祈りなさい」(44)と言われました。「愛は祈りに始まる」と言われます。神に祈る時、憎いと思う人がいたら、そこにその人の名前を入れる。「ポチの牧師」も言いました。「『神様。私は、あの人を愛します。今、この時から愛し始めます。あなたが私を愛して下さったから、私も愛することが出来ます。あなたの愛を、注ぎ続けて下さい』と祈りつつ、愛を表して行く」(横山幹雄)。この祈りがなければ、私達は敵を愛することは出来ないでしょう。祈り、そして後は体で学んで行くしかない。CS ルイスは言いました。「愛しているかのようにふるまっていると、やがてその人を本当に愛するようになる」(SC ルイス)。永遠の命に繋がるチャンレジです。イエス様のチャレンジに答えて行きましょう。